

BOOKMORNING!

from 学校図書館



読んでみませんか？ 学校司書
おすすめの本

『アンネの童話』 自由な世界への思い

1, 2月に中学2年生に、来年度の沖縄への修学旅行に向けた平和学習を行いました。平和を考える資料ということで、学校司書から「戦時下の子ども」の資料を紹介しました。当時国民学校4年生で岡山空襲を経験した高畑勲さんの『君が戦争を欲しないならば』（岩波ブックレット 2015）、国民学校1年生で被爆した中沢啓治さんの『はだしのゲンはピカドンを忘れない』（岩波ブックレット 1982）、そしてオランダの隠れ家で13歳から15歳までを過ごしたアンネ・フランクの『アンネの日記』、『アンネの童話』を紹介しました。

『アンネの童話』（アンネ・フランク 中川李枝子訳 文藝春秋）にはアンネが隠れ家で書いたかわいい童話やエッセイが収められています。いつ書かれたかの日付もあるので、その当時のアンネたち一家のことに思いをはせながら読むことができます。恥ずかしがりやの女の子や妖精、小人や小熊に託して描かれた童話は、閉塞した隠れ家生活の中で、「一人きりの時間が欲しい」「外に出たい」「希望を忘れずにいたい」などの心の思いが伝わってきます。童話はフィクションですが、家族との葛藤、外の空気がすえない鬱屈した思いがうかがえます。自然とふれあう話が多いのも特徴です。当時のアンネの「外の空気をすいたい」思いがいたるところに感じられます。

アンネたち家族が隠れ家から連行された1944年8月はヨーロッパの戦局が変わり、戦争が終わるかもしれないという希望が見え始めたころです。1944年5月から8月にかけてアンネは今まで書いてきた日記を清書し編集し直していました。最初は自分の身の周りのことを書いていた日記でしたが、ナチス政権下でユダヤ人が置かれた状況や隠れ家での他の家族との共同生活、家族に対する思いやアンネ自身のことを客観的にとらえて書くようになっていました。ジャーナリストになりたいという夢を持っていた彼女は、戦争が終わった時に隠れ家生活のことを出版したいと思っていました。「いつか出版する」という思いで編集された日記には「人はいかに生きるか」といった万人に訴える力があります。その日記と並行して書かれていたのが、童話なのでした。

昨年の12月にアムステルダムアンネ・ハウスに行く機会があり（筆者）、実際の日記帳を目にし、隠れ家にも入りました。将来への希望が何より人間には必要です。そのためにはどんな社会でないといけないか自分で考えることが大切という思いで、本を紹介しました。